

「変わること」と「忘れないこと」との境界線

2011年3月11日に東日本大地震が起きて5年が経った。早いと感じるか、まだ5年と感じるか個人間で異なるだろう。特に当事者であったか、傍観者であったかで大きく違うと思う。私の場合は完全な傍観者であった。震災時、関西に住んでおり、関東に住む知人も少なく、東北に限れば皆無に近かった。それでも日本で育ってきた人間として何かできることはないだろうか、とは当時はよく考えていた。しかし、5年間の間、震災地を訪ねたいと思いながら、主体的に関わることなく過ごしてきた。そんな自分だから、当事者感情を抜いた傍観者としての立場で今回の被災地訪問で感じたことを述べたい。

11月5、6日の2日間で聞いた話は大きく捉えれば一度は聞いたことある話で特別な驚きがあった訳ではない。しかし、実際に釜石、大船渡、陸前高田、気仙沼の被災地を訪れ、5年以上経った今でも震災の影響が如実に見てとれる風景に目を見張るものがあった。いまだにその地域に、そして多くの人々の中に傷を刻んでいる災害が自分自身の身近にあることに驚いた。

元来、日本は地震が多い国であり、最近の大地震には阪神淡路大震災、新潟県中越沖地震、そして今年の熊本の地震がある。日本の人々はできるだけ多くの教訓の後世に伝えようとする。

それが現在東北の被災地で行われている地震、津波を風化させない行事を取り組んでいる。三陸鉄道に取り組みや奇跡の一本松のモニュメント化、当復興支援ツアーもそのうちのひとつだ。震災復興従事者の一人が『被災地の当事者は帰る場所を取り戻そうとしている』と語った。そうだと思った。たとえ以前とは姿が変わっていくとしても、復興関係者は次の世代に何かをつなげようとしている結果が今の取り組みと思った。

確かに被災前の「何か」を取り戻そうという声は聞こえてきたが、しかし何を变えていこうという声は正直に聞こえてこなかった。現在、今後の災害の被害を少なくするために景観を崩してまで盛り土をしている。だとしても例えば多くの人に住むことがない町に多くに支援が必要なのだろうか、とは誰も声を上げないのだろうか。被害者支援という名目だけで大きな「はこ」をつくり、それだけで本当に復興関係者が望む復興後の被災地になるのだろうか。そんなことを考えながら被災地を周っていた。

2001.9.11のテロの数日後に当時のニューヨーク市長であったR.ジュリアーニ氏は『日常生活に戻ろう』と言った。当たり前前の生活を取り戻そう。そして立ち止まるだけではなく、今の生活から前を向く時だと言ったのだと思う。きっと東北も自分たちで選んでいい時期ではないだろうか。きっと新しい日常は以前の日常とは違いうだろうが「変わること」と「守っていくこと」を選択することで、もっと未来志向な東北に繋がると感じた。

震災経験を取り入れた人々が望んだ新たな日常を早く築けるよう、手伝うことがあれば微力ながら努めていきたい。